

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	渡 邊 裕 美 子
論 文 題 目	新 古 今 時 代 の 和 歌 の 研 究
<p>審査要旨</p> <p>論文提出者は、著書『最勝四天王院障子和歌全釈』（風間書房、2007）によって、平安時代の文学・語学を研究する新進・中堅の女性研究者に対し与えられる第二次「関根賞」第三回を受賞する（2008）など、学界において既に高い評価を得ている。本論文は、20 有余年にわたる膨大な研究業績を体系的にまとめ上げたものである。</p> <p>第八勅撰和歌集である新古今和歌集を生み出した時代の、表現の動向、位相の解明が全体の主題となっている。まず序章においては、論の方向性に関わる鍵概念としての、「本歌取」「女性歌人」「題詠」そして「新古今の周縁」について、明確な提示がなされる。本論で扱われる内容は多岐にわたるが、論者の問題意識と方法とは、この序章において言表されているといつてよい。論全体として扱われる時代は、千載和歌集の成立以後から藤原定家が没するまでの、ほぼ半世紀に収斂される。</p> <p>第一章「新古今の本歌取と同時代歌人の影響」は、比較的初期の研究業績を中心に構成された部分だが、研究の出発点となった俊成卿女の本歌取論を軸に置いた表現研究は極めて具体的かつ詳細で、特に同時代歌人作からの摂取に見られる、俊成卿女の新しい詠法の抽出と分析がなされている。そこから、新進女性歌人であった宮内卿と越前の詠方の差異、特質が鮮やかに認識される。その構図は、定家的本歌取法との距離の測定ということになるが、源氏物語摂取の方法についても、同様の方法が試みられ、得られた結論は明快である。また、これら女性歌人の本歌取論を相対化するため、「宇治の橋姫」詠の諸相、ならびに西行追悼の企画であった「花月百首」における西行歌摂取の分析が配されている。以上によって本章では、新古今時代の本歌取の方法論を、従来になかった切り口から論じており、発表の当初から学界の本歌取論をリードする役割を果たしてきた論考であった。ただし、論の核心にあくまでも定家的本歌取の原理が置かれている点は、論者の大学院における研究指導担当教員であった藤平春男の論の枠組みの中に収束している感が否めないところである。なお、本歌の認定に当たっては、論者の和歌読解力の高さが十分に発揮されていると評し得よう。</p> <p>第二章「『通具俊成女歌合』考」は、俊成卿女とその夫であった源通具の和歌を番える、藤原定家筆とされる特殊な歌合（断簡）について再検討を行った論で、前章における俊成卿女研究の延長線上に位置するものである。新資料を加え、その基礎的なレベルから洗い直したうえで、上條彰次が唱えた俊成歌供出説を否定、残存する全テキストについての詳細な注釈を付す。さらに、当該歌合が新古今和歌集の撰集資料となった可能性に言及し、時代の中での位置付けがはかられている。</p> <p>第三章「中世初期における女性歌人の位置」では、第一章・第二章で展開してきた女性歌人論を、さらに巨視的に位置付けるため、「女の歌」に対する批評的言説等を吟味した論であり、論文の前半を小括する役割をも果たしている部分でもある。</p> <p>第四章「『最勝四天王院障子和歌』考」は、本要旨の冒頭でも紹介したとおり、同テキストに全釈を付す作業の過程で得られた知見と、そこから展開された論考とをまとめた章である。後鳥羽院が主催したこの名所歌の解釈と意義については、『最勝四天王院障子和歌全釈』で述べられているが、ここではそれとは異なったアプローチを収録する。論点としては後鳥羽院自身に関わる名所の様相、当代に着目された陸奥名所の様相、さらに伊勢物語関連名所の様相を吟味し、新古今時代の表現研究として次元の高い達成を示す。そこから、当該歌書のテキスト論を展開して読みの仮説をも提示する。基礎的考察をも収録するが、今後の研究の始発点となる情報が整理されており貴重である。</p>	

第五章「『内裏名所百首』の万葉名所歌」は、前章で扱われた名所歌の展開として、順徳院内裏歌壇で催された当該百首の中の、万葉撰取の側面を照射したもので、前章の補説的意味も認められる。

第六章「『光明峯寺摂政家百首』考」は、内裏名所百首とほぼ同時期に詠まれている、藤原道家主催の百首歌を扱い、その本文集成を行ったうえで、九条家の問題や、組題の歴史における新機軸を論じている。第四章から第六章にいたる部分は、「題詠」をめぐる新古今時代の問題を焦点化する。ただし、第五章における「地名性の溶解」、第六章における「組題の立体化」という用語については、さらなる説明が必要であり、でき得ればより適切な表現を案出すべきであるとの指摘があった。

第七章以下は、「新古今の周縁」として括られる論と、考証ならびに資料紹介が並べられる。第七章「『隆房の恋づくし（艶詞）』の成立」は、従来説を批判し、後人の手による改変過程を想定する新説を示した。第八章「書かれた説話としての『今物語』」は、作者と目される藤原信実が、後鳥羽院時代に味わった挫折による屈折がその内容構成に反映していることを論じ、信実によって偽装された説話という性格を析出、当該作品への新しい理解を提示している。

第九章は考証・資料紹介だが、第一節「鳥羽院皇女「高松宮」考」では、「高松宮」が「高松院」とは別人であることを論証し、「高松宮」は藤原実衡女所生の皇女であった可能性が高いと述べる。小論だが重要な指摘である。第二節には伝二条為世筆の俊成卿女集の新出断簡、第三節では宇都宮大学蔵の僻案抄（伝飛鳥井宋世筆）を紹介する。こもごも新古今時代のテキストに関わる貴重な業績である。

以上、本論文は、和歌表現史の上で極めて大きな展開が生じた新古今時代の表現動向を対象として、明確な問題意識と方法意識とを持って縦横に論じた、ボリュームのある研究成果となっている。先述した通り、「本歌取」「女性歌人」「題詠」という鍵概念の軸で連結され、また個々の論証レベルでは、基礎的なテキストの取り扱い、書誌学的・文献学的処理からはじめて、一首一首の注解作業に膨大な時間と労力とが費やされており、その上で創見に満ちた独自の論がいくつも提示されている。さらに問題は「新古今の周縁」にも及ぶが、全体として緊密な論構成を具現している。ただ、末尾に全体を総括するような章が置かれていないため、この点やや不十分な印象も受けるが、全体の構成については序章において明確に示されており、問題はないと考える。もっとも「新古今の周縁」部分は、付録的なものであることは確かで、これを省いてより一貫性のある構成をとることもできたと思われる。しかし全体は、学界において高く評価された論文をもとにして、意欲的にまとめられたものであって、博士（文学）の学位を授与するのに、十分に相応しい研究成果であると判定する。

公開審査会開催日	2009年 9月 28日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学 文学学術院 教授		兼築 信行
審査委員	早稲田大学 文学学術院 教授	博士（文学）早稲田大学	日下 力
審査委員	早稲田大学 教育・総合科学学術院教授	博士（人文科学） お茶の水女子大学	田淵句美子
審査委員	人間文化研究機構 国文学研究資料館教授		寺島 恒世